

翻訳通信

翻訳と読書、文化、言葉の問題を幅広く考える通信

目次

翻訳の新しい動き

山岡洋一

- 古典新訳の本格化

2006年は、日本の翻訳の歴史で時代を画す年になるだろう。来年には古典新訳の動きが本格化すると予想されるからだ。

翻訳の新しい動き

山岡洋一

- 古典翻訳塾の構想

古典の翻訳者を養成し選別する仕組みとして、私塾の構想をいま練っている。希望や意見があれば、連絡いただけるようお願いしたい。

翻訳通信 〒216 川崎市宮前区土橋4-7-2-502 山岡洋一 電子メール GFC01200@nifty.ne.jp

『翻訳通信』は有料会員制の媒体にする予定ですが、当面はテスト期間として無料で配信します。

定期購読の申し込みと解除 <http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/index.html>

知り合いの方に『翻訳通信』を紹介いただければ幸いです。

『翻訳通信』を見本として自由に転送下さい。

バックナンバー <http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/index.html>

古典新訳の本格化

2006 年は、日本の翻訳の歴史で時代を画す年になるだろう。来年には古典新訳の動きが本格化すると予想されるからだ。

古典新訳ならたえず行われているし、明治初期の大翻訳時代、昭和初期の円本・文庫ブーム、高度経済成長期の 1960 年代後半のような爆発的なブームがいま起こるとは考えにくいという意見もあるだろう。たしかに爆発的なブームにはならないかもしれない。だが、日本の翻訳の歴史のなかで新しい時代がはじまる可能性が十分にある。なぜか。それは、翻訳の各種スタイルの力関係が大きく転換するとみられるからだ。

ほぼ 150 年前、日本は欧米の圧倒的な軍事力に直面して、軍事力の背景にある科学技術や思想などを急速に取り入れる必要があることを痛感した。当時の日本が全体的にみて、欧米に大きく遅れていたのかどうかは疑問であり、とくに経済的には世界的の最先端に近いほど発達していたとする見方もあるほどだが、当時の人が軍事、科学技術、思想などの点で遅れを痛感し、危機感をもっていたのは否定のしようのない事実だ。遅れを取り戻して急速な近代化をはかることが当時の日本にとって課題になり、その手段のひとつとして使われたのが翻訳であった。

明治の半ばにかけて、欧米に追いつくための手段として効率的に翻訳を行う方法が確立した。それまでほぼ 1000 年にわたって先進国中国から進んだ思想を取り入れるために使われてきた方法、漢文読み下しの方法を応用して、いわゆる翻訳調で訳す方法が確立したのである。理解することなどとてもできない欧米の名著を、その表面だけでも取りあえず日本語にして、日本語で学べるようにするための方法、それが翻訳調である。原文の意味ではなく、表面を日本語で伝えるための方法、それが翻訳調なのだ。原文の語のそれぞれ、原文の構文のそれぞれに「正しい訳し方」を決め、「誤訳」のないように訳していく、それが翻訳調だ。これは欧米の科学技術や思想が理解することなどとてもできないほど進んでいるとの認識を前提にして、やむを得ない便宜的な方法としてとられてきたものである。したがって、翻訳調とは基本的に「後進国型の翻訳スタイル」なのである。

幕末から 150 年が経過し、欧米と日本の違いは大幅に縮小した。いまでもアメリカは日本にとって異質であり、イギリスやフランスなどもそれぞれ少しずつ違った意味で日本にとって異質である。いまでもアメリカと違っている点（ほんとうはアメリカの一部と違っている点）を取り上げて、日本が遅れている証拠だといいたてる人はいる。しかし、欧米の科学技術や考え方が呆然とするしかないほど、理解することなどとてもできないと思えるほど進んでいるとは考えられていない。異質なのは何も困ったことではなく、異質だから学べるものや楽しめるものがあるというだけである。

150 年にわたる努力が実って、日本は欧米以外の国には不可能だといわれていた近代化を達成でき、後進国の立場から脱出することができたのだ。だから、翻訳調の翻訳によって、欧米の科学技術や思想を日本語という母語で学べるようにした努力も、当初の目標を達成できたといえる。幕末から 150 年の日本の歴史は、翻訳の栄光の歴史だといえるのである。

だが勝利はつぎの敗北の芽になり、栄光は墮落をもたらす。たぶん、翻訳も例外ではない。翻訳調の翻訳は、原著の意味を伝えることを目的としていない。意味を理解することなどとてもできないという認識のもと、とりあえず原文の表面を日本語にし、日本語で意味を考えていく手掛かりにすることを目的としている。だから、翻訳調の翻訳を読んでも、それだけでは原著が伝えようとしたことは理解できない。いいかえれば、翻訳調の訳書はきわめて「難解」である。訳書は単独で読むものではなく、原著と解説書との三点セットにして読むものだった。だが、「難解さ」は知識独占の手段にもなる。はったりと虚仮〔こけ〕威しの手段にもなる。おそらくはそのためだろうが、翻訳調という後進国型の翻訳スタイルが、後進国ではなくなったいまでも使われている。欧米がはるかに遠かった時代に便宜的な方法として作られた翻訳調が、いまでは知識独占の便利な手段として使われている。はったりと虚仮威しの手段として使われているのである。

はったりをかまされる側は当然ながら、こうした「難解さ」に反発する。この反発から生まれたのが「分かりやすく読みやすい」と称する幼稚な翻訳だ。

不必要に難しくした翻訳調と読みやすいと称する幼稚訳という2つのスタイルが表裏一体の関係にあって対峙しているのが翻訳の現状である。

古典とは、時の試練を受けて生き残ってきた名著である。だから、古いから良いといえるものだ。したがって古典には賞味期限のようなものはあまりないのが普通だろう。古典の翻訳はどうだろう。古典の翻訳にも古く良いといえるものがある。たとえば森鷗外の翻訳をそれ以降の翻訳と比較すると、いま読む価値があるのは鷗外訳だけではないかと思えることがある。だが、鷗外は漱石とともに、いまの日本語を作ったともいえるほどの作家だ。だから鷗外の翻訳が素晴らしいのは当たり前なのだ。鷗外のような特別な例を除けば、古典の翻訳には賞味期限がある場合が多い。21世紀に入ったいま、翻訳調の翻訳は賞味期限が切れているといえるはずである。

翻訳の賞味期限が切れていることを読者は敏感に感じ取っており、古い古典翻訳を読まなくなっている。その結果、古典翻訳は売れなくなり、絶版になり、簡単には買えなくなっている。だが、古典を読む理由がなくなったわけではない。先行きが不透明な時代や危機の時代には基本に戻り、古典に帰るのが普通だ。豊かで安定した時代にも、古典を読む人が増えるのが普通だ。そして人生のなかでも、古典を読む時期がある。青年期に読み、引退した後の静かな時期にもう一度読み返したくなるのが古典だ。だからどの時代にも、古典を読む人はかならずいる。翻訳の賞味期限が切れていなければ。

古典とは古いから良いといえる世界だが、いま、翻訳のスタイルに関しては逆に、古いものは良くないといえる。新しいスタイルで訳され、賞味期限が切れていない翻訳が必要になっている。翻訳調ではないスタイルで訳された古典翻訳が必要になっているのである。

ではどのようなスタイルが必要なのだろう。「分かりやすく読みやすい」と称する幼稚なスタイルでないことだけはたしかだ。このスタイルは猿でも分かる式の単純なノウハウ書や、お気楽な小説などに相応しいものだ。これなら内容と形式が一致する。古典は長く読みつがれてきた名著であり、人生や世の中を深く考えるヒントが得られるものだ。幼稚なスタイルはまったく相応しくない。

いま、古典新訳に求められている翻訳スタイルは、「原著者が日本語で書くとすればこう書くだらうと思

える翻訳」だと考える。つまり、原著者を理解などともできないほど遠くて偉大な存在だととらえるのではなく、単純にし矮小にして分かりやすくするのもなく、原著者を等身大の偉人としてとらえたうえで、原著の意味を日本語で伝える翻訳だと考える。原著を強いて「難解」にすることも、強いて単純にすることもなく、原著の意味を翻訳者の解釈にしたがって伝える翻訳である。

そのような翻訳にはたとえば、森鷗外や吉田健一らの例があるし、いまでも長谷川宏のヘーゲル訳がある。だがこれまでは、いうならば小さな流れでしかなかった。古典新訳のシリーズ化によって、これが大きな流れになるだろう。古典翻訳はいうならば翻訳調の牙城であり、これを攻め落とすことの意味は小さくないはずだ。

古典翻訳の担い手

昭和初期や高度経済成長期の古典翻訳ブームのとき、出版社は古典翻訳の訳者を探すのにそれほど苦労しなかったはずだ。例外もあるが、たいていは学者に依頼すれば良かったからだ。出版したい本が決まれば、それぞれの分野、それぞれの原著者の研究で第一人者とされている学者に依頼すれば良かった。

翻訳調は「学者訳」とも呼ばれている。これは翻訳調の担い手が主に学者だったからだ。学者が副業として翻訳を行っていたのではない。翻訳こそが学者の本業であった。学者なら翻訳ではなく研究をすべきだという人もいるが、それは当時の状況を知らないからだだろう。後進国日本にとって何よりも重要だったのは、欧米の進んだ科学技術や思想を取り入れることであり、その手段の柱が翻訳だったのだ。

時代が変わり、学者の世界も変わった。だが、学者が行う翻訳のスタイルは変わらない。いまだに学者訳、いまだに翻訳調である。だから、21世紀の古典新訳の担い手は基本的に学者ではない。少なくとも、各分野の第一人者とされる学者に翻訳を依頼すれば安心というわけにはいかない。学者として、研究者としての評価がどれほど高くても、質の高い翻訳ができるとはかぎらない。それに、翻訳を依頼しても断られることが多いだろう。昔と違っていまの学界では、翻訳は業績にならないからだ。

では、21世紀の古典新訳は誰が担うのか。結論をいうなら、翻訳家である。ここでいう翻訳家とは、質

の高い翻訳をする人という意味だ。世間的な肩書は何でもいい、出版翻訳者や産業翻訳者でもいいし、中学高校や大学の教員でもいいし、ごく普通の勤め人でもいいし、主婦でもいいし、定年退職後の元勤め人でもいい。翻訳調ではなく、「分かりやすく読みやすい」と称する幼稚訳でもなく、「原著者が日本語で書くとすればこう書くだらうと思える翻訳」ができるのであればいい。

このように選択の幅が広がったのはいいことだが、逆にいえば、出版社の編集者にとって、ひとりひとりの翻訳を読んで質を判断していく以外に、古典新訳に相応しい訳者を探せなくなっていることも意味する。また、古典の新訳に取り組みたい人にとって、決まった道がないことも意味する。

翻訳調の学者訳の時代には、高等教育機関が翻訳者を養成し、選別する機能を果たしていた。だからこそ、一流大学の教授に依頼すれば良かったわけだ。いまでは、翻訳者の養成と選別の機能を果たしている機関はない。大学はその機能をもっていない。翻訳学校はというと、もうほとんど冗談だとしかいえない。

出版翻訳者はもちろん、古典新訳の担い手として第1の候補である。とくに、エンターテインメント分野には、「原著者が日本語で書くとすればこう書くだら

うと思える翻訳」を行っている翻訳家があり、古典新訳の担い手になる（古典文学の大部分は当時の娯楽小説なのだ）。また、訳書と原著がすぐに手に入るのが普通なので、翻訳の質を検討しやすい。それでも、何百人、何千人もいる出版翻訳者の訳書を検討していくのは容易ではない。訳書の点数などを基準に、ごく少数の出版翻訳者に絞り込んだ後でなければ、検討していくことすらできない。だが、点数が多ければ質が高いとはかぎらない。翻訳点数は5点に満たなくても、素晴らしい翻訳ができる人はいるはずだが、そういう翻訳者を探し出すのは容易ではない。

出版翻訳者としての実績がない人、それよりも何よりも翻訳の経験がない人のなかから、古典新訳の担い手がでてくる可能性もある。いや、そうならなければ古典新訳の流れは大きな潮流にはならないといえるほどである。翻訳のスタイルがほんとうに変わるとするのなら、その担い手も変わるはずだからだ。以前なら興味をもたなかった層が翻訳に進出するようになるはずだからだ。

では、出版翻訳者としての実績は少ないか、まったくない人、さらには翻訳の経験がない人が古典新訳の担い手になるにはどうすればいいのか。その点を考えた結果を次項で示すことにしたい。

翻訳の新しい動き

山岡洋一

古典翻訳塾の構想

古典新訳の動きが本格化しようとしているので、古典の翻訳者を養成し選別する仕組みが是非とも必要になっている。そこで私塾の構想をいま練っている。

古典翻訳塾はその名の通り、古典翻訳者の養成と選別を目的とする。この場合の古典とは差し当たって、第1に名著として有名であること、第2に原則として原著者の死後50年（英米仏などの旧連合国の場合は死後61年）以上が経過していて翻訳出版にあたって翻訳権を取得する必要がないことの2つの条件を満たしている著作である。もうひとつ、これは当然だが、いまの時代に読む価値があることが重要である。分野は問わないし、原著の言語も問わない。翻訳は日本語へのものを意味する。

塾生になりうるのは、古典の出版翻訳を真剣に目指

している人であり、それ以外の資格、経歴は問わない。年齢の制限はないし、学歴や翻訳実績などの制限も設けない。ただし、古典翻訳に必要な実力を備えていることが条件であり、入塾にあたっては試験を行う。

古典翻訳塾では、塾生を教えることは最小限に抑える。原文を読み、理解し、日本語を書くといった点で当初から十分な基礎力をもっていなければ古典翻訳はできるようにならない。また、実力が不足する部分をみずから学ぶ意思と能力をもっていなければ、古典翻訳はできない。したがって、古典翻訳塾では基本的に講義や添削をすることはない。

古典翻訳塾では、塾生が行う翻訳について、検討すべき点や改善の方向を指導する。また、出版できる質に達しているかどうかという観点で厳しく評価する。

塾生は5人から7人程度のグループに分かれ、ひとつの本を全員が全文訳し、電子メールを使って訳文を交換し、議論するとともに、週1回集まって議論する。訳書で200~300ページになる本を1年間で訳すことを目標にする。

とくに優秀な翻訳は、小部数を印刷し、配付・販売できるようにする。また、とくに優秀な翻訳を行った塾生には2年目の課題を選ぶ権利を与える。2年目には本格的な出版を目指して翻訳を行う。なお、古典には複数の既訳があるのが通常である。新訳が出版されるのは、既訳よりはるかに質が高いと判断されたときだけだと考えておくべきだ。したがって古典翻訳塾では質の目標を高く設定し、妥協はしない。

古典翻訳塾は有料とする。当初は1グループのみの試験的な塾とし、成功すれば規模を拡大する。教室としては当初、川崎市(田園都市線鷺沼駅近く)の山岡事務所を使うが、他に移すこともできる。

以上はまだきわめて大雑把な構想であり、考えなければならぬ点がいくつもある。第1に問題なのは、一流の翻訳ができるほどの実力のある塾生が集まるかどうかである。翻訳には原文を読み理解する力、日本語を書く力などの総合力が必要なので、1年や2年の教育・学習で実力が高まると考えることはできない。塾でできるのは、本来の実力が開花する機会を提供することだけである。だから、実力のある塾生が集まるかどうかで、古典翻訳塾が成功するかどうかはほぼ決まるといえる。優秀な塾生が集まるのか、あるいはどうすれば集まるのが最大の問題だろう。

第2にこれに関連した問題として、出版を目指す2年目に数人のグループが成立するかどうかは分からない。塾生の数がかかり多くなければ、個々の作品の翻訳を希望する人を数人確保するのは難しい。とくに難しいのは英語以外の言語の場合だが、少なくとも当初は(1年目は)、原著の言語を英語に絞り込むしかない。だが、翻訳家がとくに不足しているのは英語以外の言語である。

第3に問題なのは、古典翻訳で生活費を確保するのがきわめて困難なことだ。優秀な塾生には古典翻訳出版の機会を提供できるだろうが、出版されてもそれで生活できるようになるとは考えにくい。翻訳者のほとんどが出版翻訳では食べていけないのが現状なのだから、まして古典翻訳で生活するのは難しい。だから、生活費を稼げるという意味での仕事を求めている人に

は、古典翻訳は勧められない。

長期的にみたとき、出版翻訳者の収入が少ない点こそが最大の問題になるだろう。翻訳は簡単ではない。まして古典の翻訳は簡単ではない。半端ではない努力も必要になる。翻訳は日本文化の基礎を支える仕事である。だから面白い。だからやり甲斐がある。だが、収入は半端でないほど少ないという状況が長く続けば、優れた人材が翻訳に集まらなくなる。優秀な翻訳者は他の職業に移っていくことにもなりかねない。

出版翻訳者の収入が少ないのは基本的に、翻訳書が売れていないからだ。とくに翻訳書1点当たりの部数が少なくなっているからだ。出版社は翻訳出版の採算悪化に対応して、さまざまな手を打っている。そのひとつとして、翻訳者の印税率を引き下げている。これでは蛸が足を食うようなものだ。翻訳書が売れるようにするにはどうすればいいのかを、出版社も翻訳者ともに考えるべきなのだろう。たとえば、新刊の一発勝負に賭けるのではなく、既刊本を長く売るにはどうすべきか(古典新訳はそのための手段になりうる)、取次・書店という販路だけでなく、直接販売の経路を開拓できないか、ひとつの本を単行本と文庫だけでなく、豪華本や大活字版、電子版、朗読など、さまざまな版で売っていく方法はないか、などの点を議論すべきだろう。古典翻訳塾が発展するようなら、いずれこの課題にも取り組んでみたい。

それはともかく、古典新訳は目の前の課題になっているので、古典翻訳塾もなるべく早く足元を固めたいと考えている。希望や意見があれば、電子メールで連絡いただけるようお願いしたい。できれば年内には連絡いただいた方が集まる機会をもち、来年の早い時期には試験的に開始したいと考えている。

連絡先は以下の通り。

GFC01200@nifty.ne.jp

山岡洋一